

A 語句の意味と読み

(1) 読み=かくご／意味=主君のそば近くで熱心に勤めること。ここでは宿直（とのい）などの雑務を勤める侍のこと。※「かくごん」とルビを振る本もあるので、お使いの教科書の読み方に合わせること。／「恪」は「つつしむ・まじめに勤める」の意。若いころの利仁が、権力者の家で下働きの侍をしていたことをいう

(2) 勢力もあり、財力も豊かな者。土地の有力者。／★
「徳」は古語では「財産・富」の意味を持つ。現代語の「人徳」とは別。利仁がこの人の婿になったことが、あとの申し出の裏づけになる

(3) 読み＝だいきやう（現代仮名遣いでは「だいきょう」）
 ／意味＝正月などに催された、貴族の大吃会・ごちそう。／「饗」は「もてなす・ごちそうする」の意。ここは主君の屋敷で正月に開かれた宴

(4) その昔。当時。 / 「かみ」=上・昔。ここから「当時はこういう習わしだった」という説明が始まる

(5) お下がり。主人たちが食べたあとの残り物。／貴人に供えたものを下げることからできた語。五位たち侍はこのお下がりをお下がり食べていた

(6) 十分に満足する。飽きるほど（思う存分）食べる。／★
現代語の「あきる・うんざりする」ではない。ここは「腹いっぱい
食べたい」という願い。この語を取りちがえると、あとの会話がすべ
て逆の意味になる

(7) 恐れ多い。もったいない。ありがたい。／★現代語の「かしこい（頭がよい）」ではない。ここは利仁の申し出に対する五位の恐縮した返事なので「ありがたい・もったいない」と訳す

B 文法

(8) 強意の係助詞。結び＝「ける」(過去の助動詞「けり」)、活用形＝連体形。／「なむ」の識別＝①(ナ変以外の)活用語の未然形＋なむ→他への願望の終助詞(～してほしい) ②連用形＋なむ→完了(強意)「ぬ」の未然形「な」＋推量「む」(きっと～だろう) ③文末を連体形で結ぶ→係助詞④ナ変動詞(死ぬ・往ぬ)の未然形の活用語尾「な」＋推量の「む」(死なむ・往なむ)。ここは「ける」(連体形)で結んでいるので係助詞

(9) 強意の係助詞。結び＝「ける」(過去の助動詞「けり」)、活用形＝連体形。／係助詞がなければ文末は終止形「けり」。「ぞ・なむ・や・か」→連体形、「こそ」→已然形

(10) 助動詞「る」の連用形。文法的意味は受身（大饗が行われる）。※主催する主人を敬う尊敬と説明する教科書もあるので、お使いの教科書の説明に合わせる。／「る」の意味は受身・尊敬・自発・可能の四つ。ここは「大饗」が行われる側なので受身と取るのがふつう

(11) 完了の助動詞「ぬ」の已然形。「ぬれば」は已然形＋「ば」で順接確定条件。ここは当時の習わしを述べている箇所なので、「大饗が終わると（いつも）」という恒常条件で取る。原因理由に取れば「大饗が終わったので」となる。※呼び方（恒常条件・一般条件など）はお使いの教科書に合わせること。

／★打消の「ず」の連体形「ぬ」と取りちがえない。「ぬれ」という

には①どうして～か（疑問）②どうして～か、いや～ない（反語）③
 なんとかして（願望）の三つがある。下に「む」「ばや」「もがな」が
 あれば願望

(13) ⑫の「せ」＝尊敬の助動詞「す」の連用形。下の尊敬の補助動詞「給ふ」（未然形「給は」）と重なって二重尊敬になる。⑭の「せ」＝使役の助動詞「す」の連用形。決め手は下に何が続くか。尊敬の「す」は下に尊敬語（給ふ・おはします）が続くときに限られるので、謙譲の「奉る」が続く⑭の「せ」は使役にしかならない。「せ給ふ」の形である⑫だけ、「飽く」の動作主で確かめる＝⑫は食べるのが五位自身なので尊敬、⑭は利仁が五位に食べさせるので使役。なお⑫の「給は」の下の「ぬ」は、未然形に付いているので打消の助動詞「ず」の連体形。⑫の二重尊敬は、五位が最高位の人だという意味ではなく、利仁が五位をことさら丁重に持ち上げて言っている言い方。※二重尊敬を「最高敬語」と呼ぶ教科書もあるので、お使いの教科書の言い方に合わせること。／★決め手は「せ給ふ」か「せ奉る」か。謙譲の「奉る」の上の「せ」は使役と決まる（尊敬の助動詞は謙譲の補助動詞には続かない）。「せ給ふ」のときだけ、食べさせる相手が別にいるかを見る。この記事でいちばん出題されるところ

C 主語・指す内容・敬意の方向

(14) 摂政・関白など、臣下の中で第一の、当時最も権勢のある人物。ここでは若いころの利仁が仕えていた主君にあたる。／「一の人」＝臣下の第一人者。この話では藤原基経を指すという説があるが、本文には名前はない

(15) 作者(語り手)から、利仁が仕えていた「一人の人」への敬意。「候ふ」は謙譲語で、お仕えする相手を敬っている。
／★地の文の敬語は作者からの敬意。謙譲語は動作の向かう先(ここは仕えられる側)を敬う。仕えている利仁が敬われているのではない

(16) 丁寧の補助動詞「侍り」。話し手である五位から、聞き手である利仁への敬意（「～ごさいません」）。／★丁寧語だけは、話題の人物ではなく「聞いている相手」を敬う。会話文なので話し手＝五位からの敬意になる

(17) 話し手である利仁から、動作の受け手である五位への敬意。「奉る」は謙譲の補助動詞で「～してさしあげる」の意。／会話文の敬語は話し手からの敬意。ここでは利仁が、身分の低い五位をていねいに立てて申し出ている

D 口語訳

(18) ああ、なんとかして芋粥を飽きるほど（思う存分）食べてみたいものだ。 / 「あはれ」=ああ。「いかで～む」で願望。「飽く」を「あきる」と訳すと反対の意味になる

(19) 大夫殿は、まだ芋粥を飽きるほど召し上がっていらっしゃらないのですか。(「召し上がっていないのですか」でも可)
／「せ給ふ」は二重尊敬なので、訳でも「召し上がっていらっしゃる」と敬意を重ねて出せるとよい。「ぬ」は打消なので「～ていない」

(20) (私が) 飽きるほど召し上がらせてさしあげよう。※
「せ」=使役の助動詞(利仁が五位に食べさせる)、「奉ら」=謙讓の補助動詞(～してさしあげる)、「む」=利仁の意志。 /
「せ」=使役(利仁が五位に食べさせる)、「奉ら」=謙讓「～してさしあげる」、
「む」=利仁の意志。三つを訳にすべて出す

E 内容・記述

(22) 取食（残り物をあさりに来る者）は追い払って屋敷の中に入れず、大饗のお下がり、その屋敷に仕える侍たちが食べるようになっていた。／「そのかみは～食ひける」の一文が、当時の習わしをまとめて説明している。五位が芋粥をすすっていたのも、このお下がりの席

(23) 主君の屋敷でお下がりの芋粥をすすするしかない下級の侍で、その芋粥を腹いっぱい食べることさえかなわぬ願いだと感じている。ささやかな望みしか持てない、満たされない境遇と、その素朴でつましい人柄が表れている。／★「おろし（お下がり）の席で芋粥をすすする」という場面とセットで考える。「飽く」は「腹いっぱい食べる」なので、不満ではなく、満たされない願いを言っている

(24) 五位が何気なくもらしたこの一言を利仁が聞きつけ、「飽かせ奉らむ」という申し出を引き出している。ささやかな願いが思いがけず取り上げられ、話がここから動き出す発端としての働きをしている。／「利仁これを聞きて」とあるとおり、五位のつぶやきを利仁が聞いたところから話が動く。語注に示した話の題名（京より敦賀に五位を将て行く語）のとおり、このあと五位は利仁に連れられて旅に出る話へ続く

(25) 五位は名も記されない下級の侍で、お下がりの芋粥を腹いっぱい食べたいというささやかな願いしか持たない。一方の利仁は、越前の勢徳の者である有仁の婿となり、その舅の財力を後盾にできる立場にあって、五位の願いをその場で軽々と引き受けてみせる。乏しい者と豊かな後盾を持つ者、小さな願いとそれをはるかに超える力という形で、二人が対比的に描かれている。※本文で「勢徳の者」と書かれているのは舅の有仁であって、利仁自身ではない。／★冒頭の利仁の紹介と、お下がりの席の五位の姿を並べて考える。この落差が話全体の骨組みになっている

F 文学史（本文全体をふまえて答える）

(26) 「となむ語り伝へたるとや」で結ばれることが多い。／★「今は昔」で始まり「となむ語り伝へたるとや」で終わるのが『今昔物語集』の型。ただし「今は昔」は『宇治拾遺物語』の書き出しでもあり、同じ芋粥の話が『宇治拾遺物語』にも収められているので、書き出しだけで書名は決まらない。書名を問われたら、お使いの教科書の本文がどちらかを確かめること

(27) 平安時代の末ごろ（十二世紀前半ごろ）に成立したとされる説話集。天竺（インド）・震旦（中国）・本朝（日本）の三部に分かれ、千を超える説話を収める。『芋粥』は本朝の世俗の話を集めた巻二十六に収められている。／作者は未詳。ほぼ同じ芋粥の話が『宇治拾遺物語』にもあり、二つを読み比べる学習もよく行われる

(28) 作家＝芥川龍之介／作品名＝『芋粥』。／芥川龍之介には『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』から題材を取った作品が多い（『羅生門』『鼻』など）

【現代語訳（全文）】

【冒頭（利仁と五位の紹介）】

今となっては昔のことだが、利仁の將軍という人がいた。若かったころは、その当時の最高位の人（摂政・関白）のお屋敷に、熱心に勤める侍としてお仕えしていた。越前の国に有仁といった、勢いも財力もある有力者の婿であったので、いつもその越前の国に住んでいた。

【大饗の場面】

そうしているうちに、その主君の屋敷で、正月に大饗（貴族の大がかりな宴会）が行われたが、その当時は、大饗が終わると、残り物をあさりに来る取食という者は追い払って中に入れず、大饗のお下がり、その屋敷の侍たちが食べるようになっていた。

【芋粥のやりとり】

この五位が、その席で、芋粥をすすって、舌を鳴らして、「ああ、なんとかして芋粥を飽きるほど食べてみたいものだ」と言ったので、利仁はこれを聞いて、「大夫殿、まだ芋粥を飽きるほど召し上がっていいのですか」と言う。五位は、「まだ飽きるほど食べたことがございません」と答える。利仁が、「さあ、（それなら私が）飽きるほど召し上がらせてさしあげよう」と言うと、五位は、「それはたいそうありがたいことです」と言う。